

2010年度海外研修・研究等助成事業 研修報告

ESD先進国ドイツに学ぶ環境教育

—地域づくり参加型の「INOHANAプロジェクト」の構築を目指して—

静岡県浜松市立三ヶ日中学校 教諭 山田 達夫

グローバル化、環境問題、情報化など地球規模で大きな社会的変化や課題がある今日、世界各国で「ESD (Education for Sustainable Development) : 持続可能な開発のための教育」の取り組みが始まっている。ESDは、地球的視野で考え、様々な課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となるよう個人を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育のことである。わが国においても、地球環境を保全でき、持続可能な社会づくりの担い手となる人間を、初等中等教育の段階から育成することを目指している。そこで、ESD先進国であるドイツを研修地とし、ESDの趣旨を生かした教育プロジェクトの手法と成果、課題を明らかにすることを研修の目的とした。

現地では、チューリンゲン州文科省の計らいで、ESD実践校である幼稚園・小中学校・発達支援学校をはじめ、協力企業・NGO団体、さらに行政機関(州文科省・市長)を訪問することができた。

ランゲンヴェッツェンドルフ中学校は、行政・ホテル企業と連携して「ミニコック」プロジェクトを進め、生徒が地域の食料・食材を学びながら、コック業の仕事に取り組んでいる。また、生徒の手によってつくられた校庭は、ミツバチの巣箱、野菜農園、ピオトップ、草木など自然と共存する空間であり、ESD実践の場となっている。

「モーレンタールの雀たち」幼稚園は、園と行政(市)とNGOが協力したESD実践校で、市の特産物である「りんご」をテーマにした「自然・果物・ジュース・味わい」プロジェクトを進めている。五感を使った自然体験や興味・関心を引き出す学習など園児の発達段階に合わせた活動が生まれ、NGOがこのプロジェクト用に考案した教材を提供している。

シュタインハイド小学校は、マルチプリケーター(ESD普及員)でもある校長がリーダーシップをとるESDに熱心な小学校である。特徴的なことは、ESDを取り入れた学校経営にある。4つの学校経営目標とは、①持続可能な教育(ESD)の推進。②確かな基礎学力。③しつけ(あいさつ、他人を敬う、人との接し方、誠実に対応する)を身に付ける。④保護者、地域住民を含めた全員参加の学校経営である。

さらに、ESDを推進している州文科省や州教員研修所、アポルダ市長への訪問を通して、教員研修、マルチプリケーター養成の現状を知ることや、現場の教員を含めたESD関係者と意見交換をする貴重な機会をもつことができた。

今回の研修・視察の結果、明らかになったことは次の3点である。ESDの実践には、①教員のアイデアや工夫が必要で、教員がチームを組むことで教科横断的な学習を展開している。②学校、行政、企業、NGO等の連携、サポート体制ができてきている。③学校や地域にあるさまざまな資源(自然、森、校庭、人材、歴史等)を活用している。また、ESD推進のキーワードは、「つなぐ」と感じた。「人と人」をつなぐ、「人と自然」をつなぐ、「学校と社会」をつなぐ、そしてこれらをつなぐために体験や活動が存在するという構図である。また、「つなぐ」役目は、学校の教員、行政のESD担当官、NGO職員など、そこには必ず「キーパーソン」となる人物が存在した。

学校は社会の縮図と位置づけられ、ESDを通して、社会に出た際に役立つ資質を育成している。つまり、ESDはすべての人の課題であり、人づくりである。



シュタインハイド小学校訪問